

献身の果てに

小城ゆり子

献身の果てに

献身の果てに

朝、夫の長兄から電話があった。いつもの通りのぶっきらぼうだが、少し切迫した声だった。

「訃報だよ」

「訃報？ 誰の？」

「広の」

「ええっ！」

「交通事故だというのだが、くわしくはわからないんだ。ぼくも今知らせを受け取ったばかりで。お弔いとか、わかったら、知らせる」

夫の携帯電話に電話するが、電源が入っていないくて、つながらない。夫は、朝早く、車でゴルフに出かけている。

七十歳代の夫には、二人の姉と六人の兄があった。夫は末っ子である。兄姉ももう年寄りで、すでに姉一人と兄三人とが鬼籍に入っている。

義兄、広は夫より四歳年上で八十歳に近いが、腎臓がんを克服したばかりだった。腎臓を片方摘出して、残ったもう一方の方がようやく正常に働きだし、皆、やれやれと胸をなでおろしていたところだったのだ。それが、まさか交通事故とは。

広の家に電話すると、甥・勝行の妻が出た。いつもは広たち両親とは別居しているはずであったが、父親が交通事故で、家に来ているのだろう。

「ちょっとお待ちください」

と彼女は姑と電話を替わったが、

「うーん、うーん」

と姑、広の妻はうなっているだけである。

また、勝行の妻が電話に出た。昨日の朝、広は散歩に出て、近所で車にひかれた。同居している次男の正治が勤めから帰り、父が夜遅くなっても戻らないので、警察に電話した。すると、近所で交通事故があった、身分証明書とかを一切持っていなかったの、誰かはわからなかったが、たぶんその被害者だろう、と言われたという。近所の事故でも、日中家にいたのは、今も「うーん、うーん」としか答えない障害者の克子だけだった。この家の交通事故は広がはじめてではない。二十年前、克子が自転車でのパートの帰りに車にひかれ、頭を損傷し、病院で死線をさまよった。死ぬかと思われたが、一命をとりとめ、頭脳の半分を失い……重い障害をかかえる身となっていた。

それからの広は、まだ退職前の身だが、妻に献身的につくす夫となった。克子は、生きていうだけで、もう何もできない。パートはもちろん、家事もできない。普通に会話することもできない。失語症だった。寝たきりでないだけ広にとって幸せだったろうか。

それまで家事は妻にまかせつきりだった広だが、この後、勤めの身のまま家事一切を引き受けてがんばった。彼は朝早く起きて、妻のために彼女の昼の弁当を作り、それを置いて出かけた。

「夜、家へ帰ると女房がいる。それだけで生きがいがあるんだ」と彼は言っていた。

だが、現実は厳しかった。克子は、失語症のため、自分の気持を表現できず、そのためいろいろ

らして夫につらくあつた。ひどいときには夫を殴り、蹴り、暴力を振るう、という話が伝わってきた。それがどの程度かはわからないが。息子たちは、家を出て行った。広には、献身と忍耐の日々が二十年も続いた。

その間のある日、広から電話があつた。

「隣の土地を売ってほしいんだ」

広・克子夫婦の家の隣に、夫の土地と家がある。もともと、夫と広が兄弟で土地を買い、半分ずつ分けて、それぞれの家を建てたのだ。その後、私たち夫婦は事情があつてその土地を離れ、家は人に貸していた。家が古くなって、人が住めなくなつたので、賃貸はやめ、売却を検討していたところだつた。その土地を克子がほしがっているという。

「女房は貧乏な家に育つて、自分の土地がほしいと思つてきたんだ。そのため、儉約して、金も貯めた。ぼくは女房のその願いをかなえてやりたいんだ」

克子は、サラリーマンの妻として、儉約し、パートもして、交通事故で倒れるまでに四千万円もの貯金をしていた。その上、交通事故の補償金も入つた。金ならあつた。私たちは、土地を売り、二束三文の家は、そのまま無償で貸した。

登記で、私たち夫婦は広と司法書士の許に行つた。克子は自分ではできないので、代わりに広が来たのだ。その帰り、私たちは克子と一緒にになり、四人で食事をした。克子は終始、にこにこして、その日は穏やかだつた。にこにこ笑っているばかりで、おかしいとも思えたが、こんな穏やかな日もあつたのだつた。

やがて長男の勝行の結婚式があつた。末席に座らされていた克子は、具合が悪いようだつた。きちんと静かに座っているのが苦痛のようだつた。途中で、克子の姉が彼女を外に連れて出た。両親への花束贈呈も、広一人が受けて、それでも式はとどこおりなく終わった。外に連れ出された克子はもう戻らなかつたが、それも良しとするべきであろう。

そうして年をへて、義兄、広は定年退職し、家で全面的に妻の介護をするようになった。病院の治療の効果はあり、克子の失語症も好転し、暴力を振るうこともなくなつた。しかし、不幸はこれだけでは終わらなかつた。

克子はまた死線をさまよう事態になつてしまつたのだ。胃の検査をして、バリウムが出なかつた。腹痛をこらえて、便秘を我慢していたため、腸の中で固まつたバリウムが爆発し、猛烈な痛みに見舞われ……病院で、死ぬか生きるかの境目だと宣告されたという。

「なんで早く医者に行かなかつたのかなあ。バカだなあ」と夫が嘆息する。

「お腹が痛かつたでしょうにねえ」

しかし、失語症が回復したといつても、彼女はバリウムが爆発するまでの痛さを人に訴えられなかつたのではないか。

克子は不死身だつた。病院での大手術にも耐え、生還した。人口肛門を持つ身となつたが。

「良かったわねえ、義姉さん」

「うん。でも、人工肛門は嫌だろうなあ」

その気持はよくわかる。しばらくして、人工肛門なしですむようになるという新しい医療が開発された。つまり、大腸がバリウム爆発で機能を失つたから人工肛門で用を足していたのだが、

そういう大腸を十分に回復させる手術が可能になり、肛門も元通りに甦ることになるというのだ。広と克子とはすぐそれにとびついた。

その新しい手術がなかなかうまくいかなくて……またも克子は苦しんだ。

「良かったよ。克ちゃん、うんちが出たんだって」

「そう？ 手術、成功したのね」

夫は兄嫁の克子のことを、親しみをこめて克ちゃんと呼んでいる。

その頃、広夫婦の次男、正治が親の許に帰ってきた。父親の苦勞を見かねたのだろうか。それとも今までの生活を続けるのが大変になったのだろうか。彼は、派遣社員として働いていて、四十代でまだ結婚していない。

克子は自分で家事はやれるようになった。しかし、そうなって、克子は広と離婚したいと言うようになった。今までの夫の献身を彼女はまったくわからなくなっているのだろうか。彼女は、隣の家、つまり私たちが提供したボロ屋に住んで、広とは離婚したいと要求しているという。

「庭に離れを造ってやればいいのにな。金なんかいっぱいあるんだから」と夫は言うが、広たちは離れも造らず、依然として克子はボロ屋で暮していた。しかも離婚したがる気持はいよいよ強いのだという。

そこへ、広の腎臓がん手術に続けて交通事故死が起こったのである。

葬儀はすぐに行われた。私は葬儀の日にもどうしても外せない用があった。通夜には行くつもりでいたが、甥たちが、遠方だから来なくてもいい、と言ってきた。結局、夫だけ葬儀に行った。「補償金も、いっぱいもらえるだろう。何しろ、歩いているところを車ではねとばされたんだから。それにしても、広兄さんは、腎臓がんを治したばかりというのに、運がないよなあ。左右よく見て歩けばいいのに」夫がぶつぶつ言う。

葬儀の一ヵ月ほど後、次男の正治が電話をかけてきた。今から一年前に亡くなった伯母と伯父の遺産を広がもらったはずなのに、そのお金が見当たらないという。

「通帳を見てごらんよ。遺産を分けたのは、ぼくだが、広兄さんにもちゃんと送ったよ。通帳にあるはずだから、見てごらん」

先に亡くなった義姉と義兄とは、子供がいなかったので、私の夫が窓口になって、兄弟で遺産を分けたのだ。

「お金のことばかり言うんだな。事故の補償金もろくにももらえないとか言っているらしいが、いっぱいお金が入ったという、ぼくたちがそれを狙うとでも思っているのかなあ。あのうちは、克ちゃんも、息子たちも、お金のことばかりだな。何でも家の金庫に札束を入れているらしいよ」

「泥棒にあったらどうするの？」

「あの家に現金が何千万もあると人は思わないよ。耐火金庫だから、火事にも強いし」

結局、広の献身は、どうなったのだろうか？ がんばっただけ損か。妻にも、息子たちにも、報いてもらえることがなかった。それでも、彼も、そんなに不幸ではなかったのかもしれない。献身だけはできたのだから。

